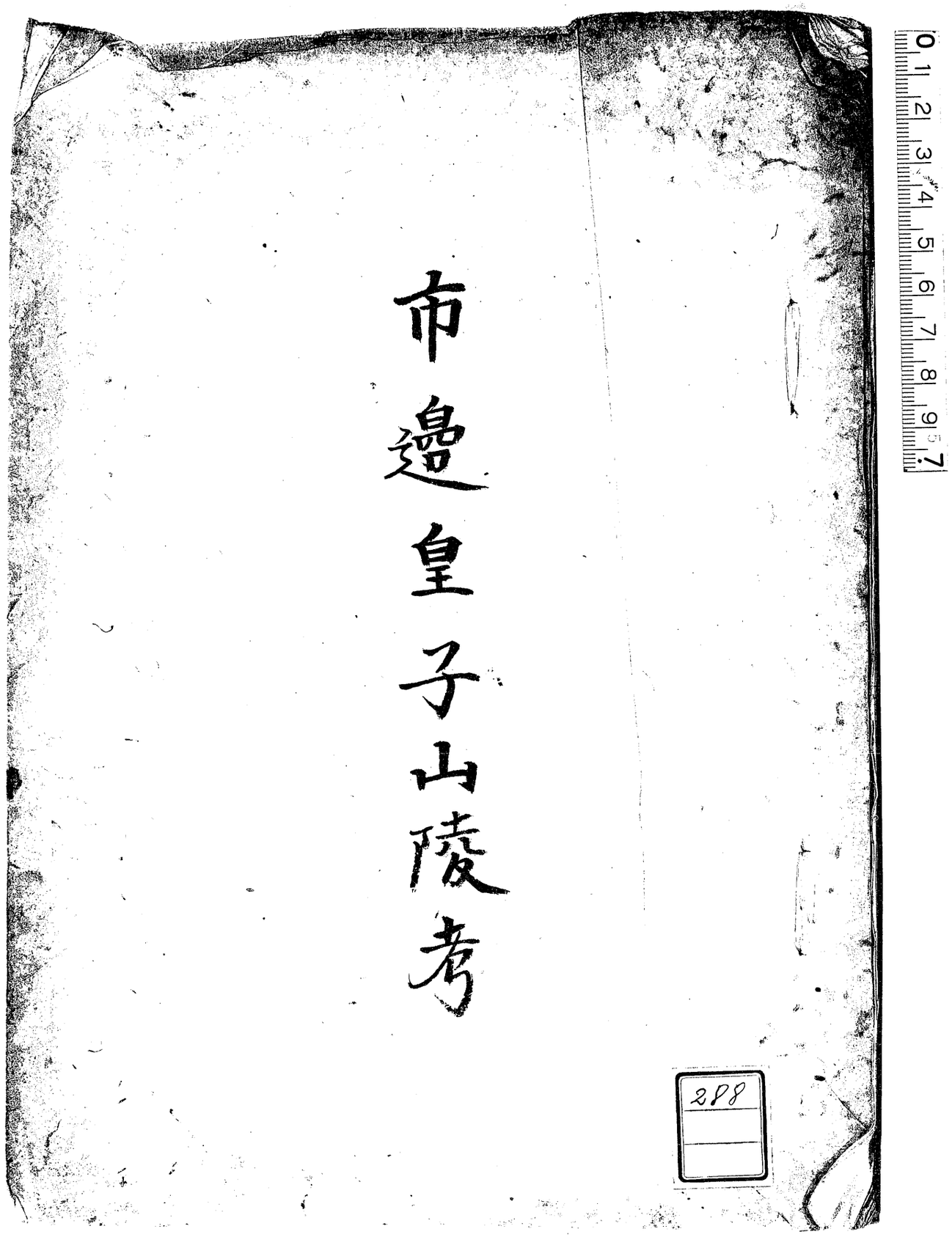


タイトル番号：0104

書名：市邊皇子山陵考：
蒲生舊地考之内

1冊

蒲生舊地考之内

長野義言謹識

市邊之忍歯王

王ハ履中天皇ノ皇子御母葦田宿禰之女黒比賣命

顕宗天皇仁賢天皇二帝之御父也

忍歯ト申御名義ハ顕宗天皇記ニ此皇子御骨之證ヲ

云トテ亦以其御歯可知ト申タル條ニ御歯者如三枝

押歯坐也トアレバ御歯ノ押歯ナルヲ以テ御名ト爲

タル也（反正天皇ノ御諱ヲ水歯別命ト申奉モ其御歯上下等齋既如貫珠ト有ニ依レルト同例也）

押歯就和名抄ヨ蒼頡篇モ齵歯重生也齵歯於曾波ト

50907
寄贈

とつり記傳云冠辞考にしるの條に此を引て襲重ものの歯
おはせと云せつり如三枝とも彼草に三莖の相
對へる狀に重ものの御歯にてあるべけむ
市邊之とあるも市邊と云所に住ものの押歯王と申
支々又市邊と負ものの元にもの御名欽日本書記
顕宗天皇巻に磐坂皇子とも云へり履中天皇紀に元年七
月己酉朔壬子立葺田宿禰之女黒媛爲皇妃妃生磐坂
市邊押羽皇子御馬皇子青海皇女とくあれど磐坂を
此皇子の住ものの所の名にて市邊を元にり縁ある
地名をとりて負ものの此例猶有る也磐坂を大和國城
上郡に磐坂村あり同郡郷名に大市上市つるを市場
ありしし故の名歟又を此皇子の莊園寺有し故の名歟
但此皇子の柱なりしを別所歟今も知難し
市辺を記傳に小山城國綴喜郡に市野辺村と云今あり
其処加又靈異記に河内市辺井上寺之里を云ものを
もあり今河内國志記郡國府村の辺に市辺墓と云もありと云り義言按に河内國
にも此皇子に縁あるを其莊園にてもあるべし又按
に此皇子幼年之御時を近江國に住ましと支るを有
しにや近江にも縁つり其所以を皇子の御母黒媛命
を葺田宿禰の女にて此氏を姓氏録に葺田首天麻比

止津の命之後者（元た宿禰として後より首姓を給へるゆえ）別なる其祖天麻比止津乃命を天之御影神の従夢として天律彦根命子也此神の女息長水依比賣（開化天皇之皇后也）を近江國坂田郡阿那郷息長里（垂仁天皇御世より天日槍住多りしも此處なり）に住て彼御影神の御霊の御女也（御影命て今三上に祭り）さて彼天日槍但馬國小て住ある子孫多く近江國に来て住めるを息長とて彼子孫多しそを神功皇后の御父を治奉りて坂田舊地考小委〻く弁へたるを見て知るべしそれより天御影神に近江三上に祭り其御祖神天津彦根命の敷地にて今彦根と云所有夏等に委細に弁へたり（今此彦根

神社を治津彦根命と云て非なり）然るに彼葦田を但馬國氣多郡に葦田神社ある其処より出たる氏にて大和國葛下郡なる葦田（今庁園の朝倉と云て即是也）を同氏人の住處なりし故に出たるなるし

此皇子の同母妹と忍海郎女と申も元は近江國息長の忍海（今も名のみ傳へ唯大安寺二綱蝶記等に残れり）より出て大和國の忍海を是より出る證も坂田舊他考に弁へ多り猶いまく市辺之押歯皇子近江の蚊屋野の御狩に未座て翌朝未明に雄略天皇の爲に殺されたまひし其後九年経て置目媼より其御歯の形るどを知居て

證とおたるを平日より見馴たるし皇子なるべきを有べ
き次第なれを今彼皇子の山陵あるべのたり近き処小
市原郷あり少西へ寄りて市田と云荘あり前後を定
の難なれ此皇子より縁ある名とこそ思ふ

市邊之押歯皇子乃山陵

蒲生郡壊塚村ノ往古より古塚あるて市辺皇子の墓
なりと云傳たり（仙臺領にて百年許を前御代に人人あるし人名の良々物をとて古保志塚と改めたるを今その云と其頃の書にも古保知塚とのみあり）近頃正しき證出り
きるを此塚を雄畧天皇の御代より皇子と埋たりし塚
なりそを顕宗天皇の御代より其塚を壊て東の山陵に
改の給へたる度あるを壊塚の名明しかなりきれを此
処を皇子北九年の間盤隠坐りし処なる上に當昔此處
にも御陵を築せ給へる度書記の傳未だ云ふ如く
なれを此御墓も有へき度なり
今存る塚を二ツ及て大の方東西六七間南北五六間許
の小山にて上ハ七尺より四尺許の石あり其外大名數
多有て石槨の狀今猶現然なり（あたりを大方田地となれり）其少西
間より六間許離て今一ツ小塚あり今石のみ立
るづつ上る地蔵あり是を平地にて東るるとを小
し今蒲生野と云処にて七八丁南にて壊村中に在り

書紀ニ皇子の御骨を堀出て見るに押歯皇子御骨
ニ諸共ニ殺されたる皇子舎人佐伯部仲子之尸交横
御骨を分る支難りし故皇子之乳母が教ニ依て漸
分給ひしかども猶髑髏別難りし故ニそこを起雙陵
と作て葬とあるニ能あり然れど此山陵も皇子と
仲子之墓也さて皇子の御骨御歯等東の方ニ山陵作
て葬給ひし支次の文ニて明らかなれども其改給る
東の山陵を何ものの地ぞ知人も無くて千年餘を過た
りしを古学みさかりなる時ニあひて いやしきかも
たふときかな

去文政四年辛巳春二月同郡御園郷妙法寺村茂助時地
なる熊野林の古塚を開しかば巨骨及歯三十枚獲た
り其春金谷小枚大朗記之云益村之地昔有巨利石
妙法寺或曰源語中所載妙法寺是也寺廃久矣今為其
村名云村有古塚號丑文塚塚今屬村人茂助者今茲辛
巳之春茂助発之獲巨骨及歯牙數十枚髑骨圍幾二尺
歯牙率背長三寸許衡至之其堅如石云々塚之所壓其
所以名土人固無有知之者今其所獲亦莫識為何骨也
唯以其歯及藏之固塋埋不苟意之以為或是巨人骨也
云云 ちなせり 梅多れども勿論取処るし義言去し

弘化三年三月愛智川成宮王殿醫師の許にて初て此書を見る支を得たり尤奇怪く堪ぬ其後八日市の社中より其実否を問るに同四年其実有る支と云ひこせ為ひ然れと御歯を其郎近所の藪中に捨つるを今を別しと云嶋村紀孝と云其舊名失もむ支と欲て地主茂助に託て見せめたるに翌檜藪中より其御歯十枚獲たり嘉永元年十二月中沢成則許に持ちめて見奉るに前書の如くもあ祢も尤尋常の御歯にあ次其形記に如三枝押歯坐也と有て上に注ったる処に少も違ふ支れし是に依て先市辺押歯皇子の御歯なる支を知りぬそを寸餘の歯にて身長も亢一丈許なるへ可れを必十餘百年前人なる支をけまもなく若疑ふ人もあ可む欲して香具賣（所謂野与に歯板職也）と呼て見せしに尤人歯にて是を上向に治へ欲り目是を下向とつふさふ云勿論塚の大さ具石棺の巌重なる支疑無られを説をキ可ど偖其塚の所を問へ彼壊塚より一里許正東にあたると答ふ弥古支記の傳さへ尊く覚て皇子覺御を安康天皇四年十月（一説十二月欤）是旗略天皇の元年にて今年迄千三百九十二年の霜露を凌て さ次うに名王の御跡を拓さりけりと思に

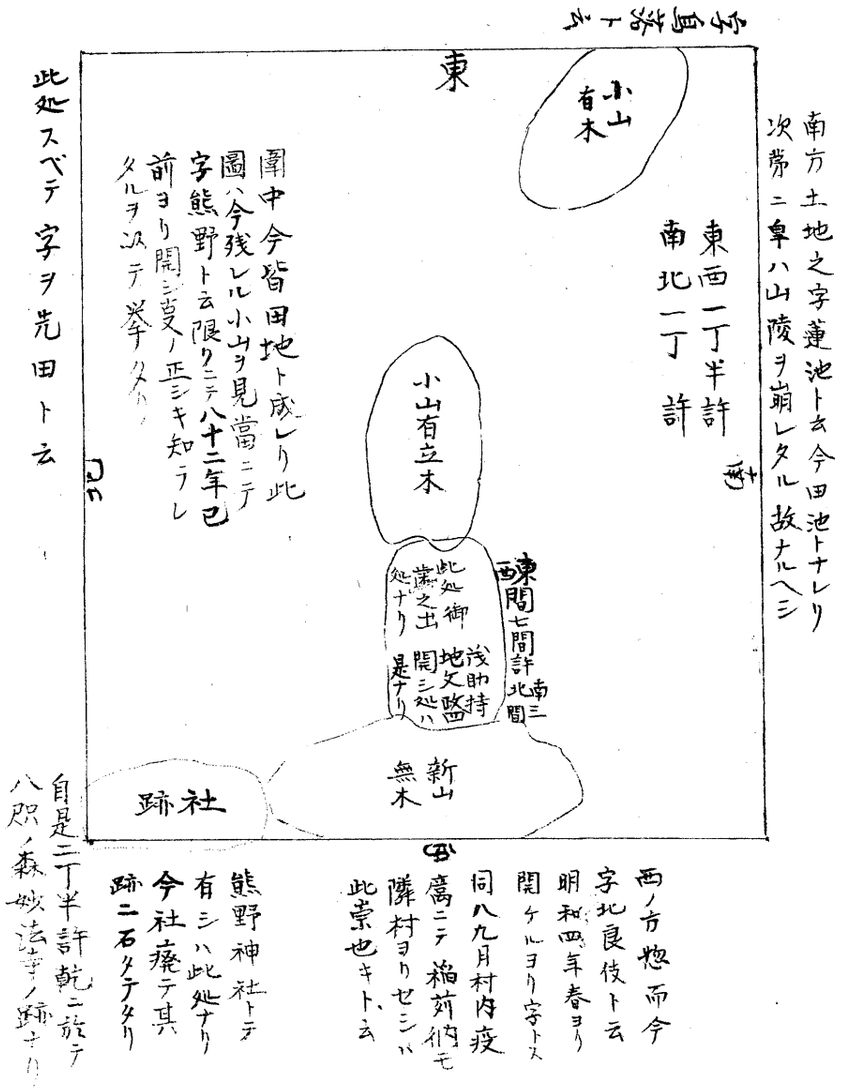
調さへせねあれさて其地主茂助と始其時共ゟ開し人々
ゟ有しさ海を開ふ田中ゟ熊野林とて往古より
開乃た必崇る所あり其処ゟ小社有しゝと今た絶て
其跡たり也其辺ゟ小山有せる処三ツあり其一ツ
を開しゝた仆の歯廿枚出たり白き支雪の如く堅支
石如くなりき比餘年捨置て雨露ゟあたらし故ゟ
今た如此上た黒色つきて美しかゝるれゟ大さも
是より大く見えし赤其時腕の骨と覚しき二の出
たり長さ二尺計りて各闇両手ノ指合雑さゝ有しゝ
と其ハ元の石棺の中ゟ納て元の如く埋しゆ中ゟ

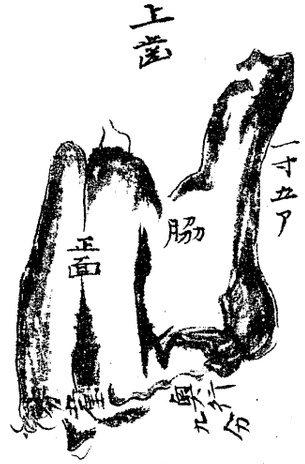
色赤く成まる髪もの切々るるが有しゝと そた放り
つと云備其御歯を今の権衡て量るゟ

奥長一寸五分	廣八分五重	行九分五重	目方五匁七分
同長一寸五分	廣八分五重	行九分	目五匁三分
前長一寸五分	廣九分五重	行七分五重	目五匁三分
同長一寸五分五重	廣四分五重	行一寸五重	目四匁八分
同長一寸四分五重			目四匁五分
奥目三匁八分	前目四匁五分		
歯三ツ 一ツ三匁二分	一ツ二匁四分	一ツ一匁五分	

其圖左の如し

妙法寺村熊野林之山陵之圖





今年嘉永二年三月役山陵拝まむとて人々誘て御園
る妙法寺村より行見きに前圖の如くにて四方に山
陵の名残猶召たる中央の小山御背御歯等の出たる
処也鍬にて猶しらむ下に石乃室有て其を開うもと
せしに忽件の物出たる故に元の如くにして埋て置つ
此西に開と云て明和四年に開し処にて其時を甚
しく崇有て八九月大疫癘にてとうさ如くにしき乳
と語る御歯乃出たる処より行て木立ありて草原と
なりあれたるくへる間しうむるとのこと
問へるまゝ源をなりるなれ乃名野の御うちを知に
小笹原にて神乃御陵はみ皇子尤命此如くつきとこの
壊塚にて芝もいと云るれたる御陵の様子とのひあるかき
ものと等しくきくつてもの御とりくるるしてて
まれかを乃ものとひとり紀をるき紀之い神そなるさりる
ものを蚊屋郡の御埴うそめ旅にもるを神上ぎき
かくて倩按に御歯の大さ堀出しと時を是うも猶
大さあり載ときそば先如此なり尺身長なども一丈
小く尺九尺一丈の間を云べくに次分論うに御代の
頃の人を其許なる支常なる尺今此人の心にを外國
人乃是にくくてを小きみもて疑をむが為に今